

20m08HO提出課題例

学びのための指導・支援のあり方

教育方法論 m 第 8 回 テーマ「学びのための指導・支援のあり方」3 班

(1) 「新しい時代の教育方法」から

全体の要点●生徒へ考えさせたいことは直接的な明言を避け、間接的に問いかけることが生徒にとって必要であり、生徒に考えさせることが重要である。また、学校とは人と関わりながら学ぶ場所でもある。

ポイント 1)プログラム型の系統学習かプロジェクト型の問題解決学習の長所を生かした統合的学習システムが求められている。

2)生徒へ考えさせたいことを、間接的に問いかけることが必要。

3)人と関わることや人と交わることができない。

(2) その他のネット資料から長所・短所

全体の要点●生徒が安心して意見を言える場所を作ること。また、生徒の意見は一人一人の時間を取り、しっかり考えさせること。そして、どのような意見でも大切に扱うことが重要である。

ポイント 1)安心・安全な場所を作ること

2)どんな意見でも大事にすること

3)先生が意見を言ってみること

4)生徒が一人で考える時間をしっかり取る

(3) その他のネット資料から長所・短所

全体の要点●コロナの影響によって、人と関わりながら学ぶ授業ができないため、現在では生徒の意見を共有できる展示スペースを作るなどによって、人とかかわろうとする気持ち、仲間意識を育てている。

ポイント 1)コロナの影響でも仲間とのつながりを作る工夫。

2)授業中に上がった意見や学習の感想を共有できるような展示スペースを作る。

3)子供同士、互いを理解していくことによって仲間意識が芽生える。

(4) 自分の意見

全体の要点●生徒に意見を考えさせ、発表してもらうことはとても大事なことであり、それらの意見一つ一つがとても大事な授業の教材となりえる。また、学校とは人とかかわる場所であり、そういう環境を作っていくことも大事だと考えた。

ポイント 1)人とかかわり

2)生徒の意見

3)環境を作る

(5) 出典(文献名、url 等)

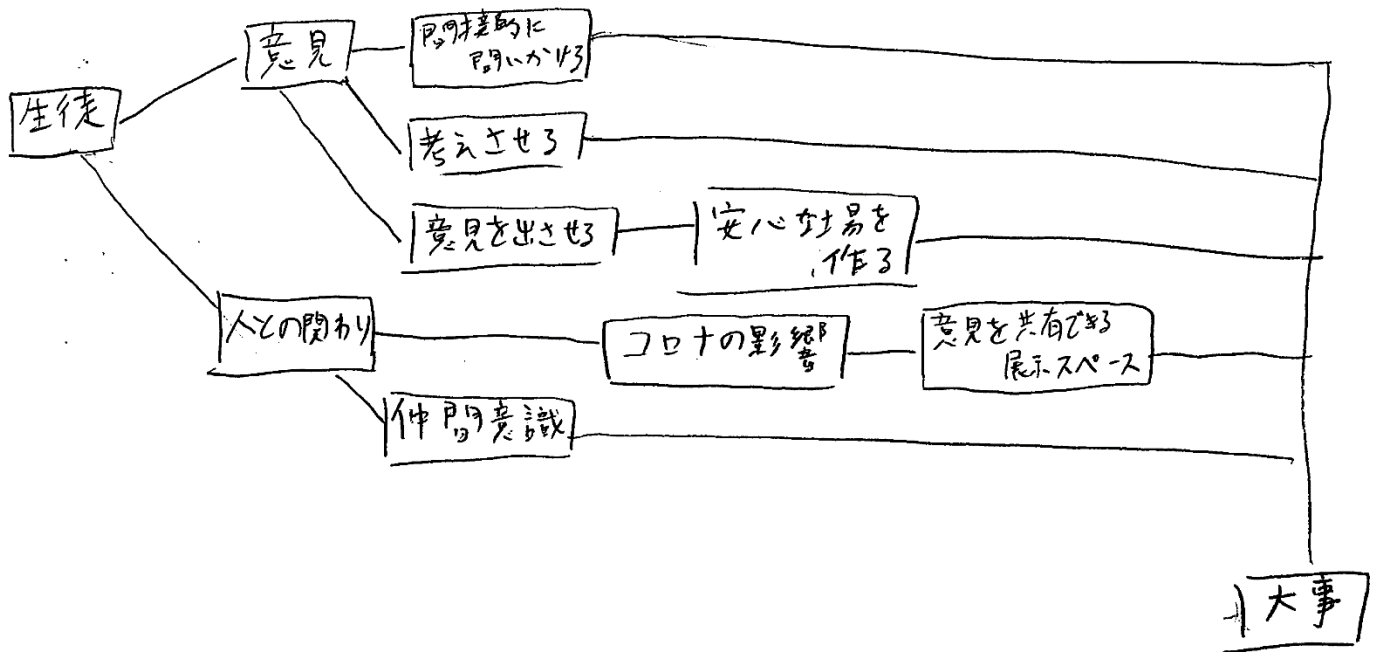
(1) 授業で意見が出ない？生徒がいきいき意見を交わせる「安心安全な場」の作り方

<https://quest.eduq.jp/anshin/>

(2) コロナ渦でも「子供同士の関係性」を育てる授業の工夫

<https://kyoiku.sho.jp/49534/>

テーマ(学ぶのための指導・支援のあり方)



学習環境としての時空間

教育方法論 m 第 8 回

テーマ「学習環境としての時空間」 班 1

(1) 「新しい時代の教育方法」から

全体の要点●

教室という空間とは（佐藤学）

→権力空間としての教室

- ・前方に教壇・教卓・黒板がある
- ・教壇・教卓・黒板に正面から向かい合う形で子供たちの机と椅子が整然と並ぶ
- 上意下達的な伝達システムを中心にいる教師を権威化する機能

上記のシステムから語りと対話のある空間に変えようとしている。また、語りと対話のある空間は暖かな彩りある空間である。

オープンスクール

→1960年代のイギリスで、子どもの自由で主体的な活動を保障するために始まった。1970年代になるとアメリカでも建築されるようになり、現在、欧米諸国を中心に普及している。学校にオープンスペースがあることが特徴で、壁のない学校ともいわれている。

→片廊下一文字型校舎

→細長い廊下や四角い壁に仕切られた同型の教室がなく、学習スペース、工芸スペース、音楽スペース、多目的スペースなどが配置され、子どもたちは様々なコーナーを自由に行き来するというスタイルです。ただし、形態は一樣ではなく、学校によって多種多用である。

→・ワークスペース型

- ・ラーニングセンター型
- ・特別教室型

現在の授業はアセンブリラインという工場の組み立てラインのように機械的な流れ作業となりがちである。しかし、現在はこのような形式的で堅苦しい制度の時間ではなく、今ここを生きる時間の充実が求められている。そのためには、柔軟な時間割編成が必要である。

Ex.1 モジュール学習

→15~25 分程度の学習活動を 1 授業単位として、その組み合わせによって時間割を編成する。実際に外国語の習得には毎日練習することが必要だという立場から、一日の英語の授業を(50 分)を二日に分けて 25 分で行うといった事例がある。

福井市立至民中学校

→教育センター方式

- ・すべての教室がオープンスペースを中心に教科専用教室と教科ステーションが配置されている。
- ・基本的に、生徒は各教科教室に移動して授業を受ける
- ・各教科教室には学びごとの材料や成果（先輩たちが残したの）が蓄積されており、閲覧・参照できる。

→異学年型クラスター制

- ・異学年の学級が隣接されて構成したクラスターが基盤となる
- ・視覚的にイメージしやすいように色で区別されている。
- ・上級生・下級生がともに一年間を過ごす。→協同性、団結力が高まる。
- ・教科学習、総合的学習、行事、生活全般にわたって協同的に生活設計、問題解決にあたり各クラスター独自の文化が想像される。

→70分授業

- ・生徒の主体的な探求や協同を重視した問題解決型の授業では生徒の指向、判断、表現による学習活動が展開されるため、50分では時間が足りないから。

(2) その他のネット資料から長所・短所

教育センター方式のメリットとされている各教科のエリアにある教科教室へ移動し、そこで授業を受けることによって、生徒が時間割を意識しながら自ら教室へ移動することで授業参加の態度が能動的になるというものがあるが、それだけがメリットなら毎時間全校生徒を移動させることのデメリットの方が大きいと考える学校もある。

(3) 自分の意見

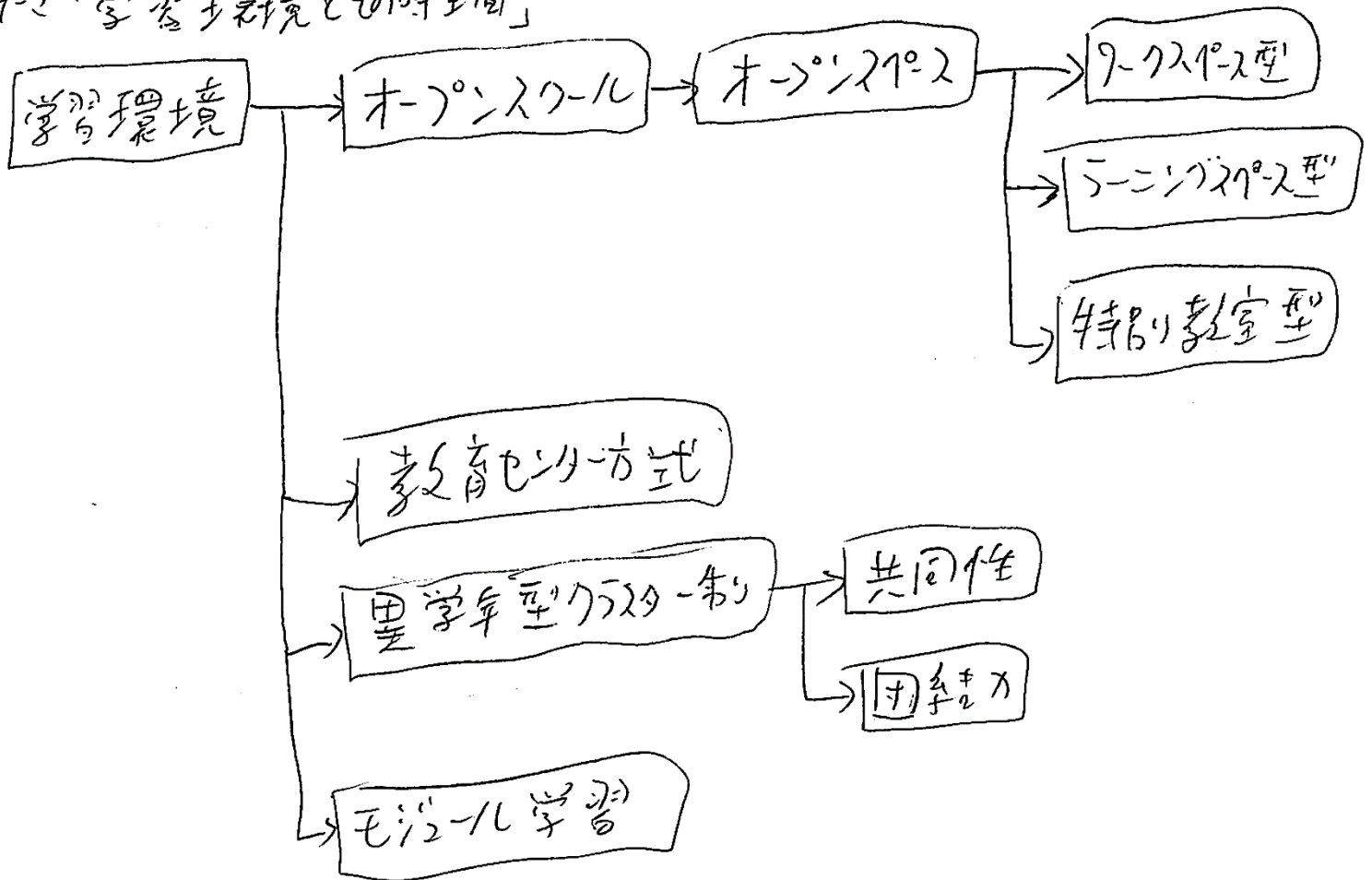
全体の要点●

福井市立至民中学校のように型に当てはまらない授業形態は子どもたちの興味・関心を引き出す次世代の教育方法として、推奨したくなるようなものである。義務教育の範囲内でもそのように独自の教育方法を取り入れることは大事だと考えた。

(4) 出典(文献名、url 等)

- (1) <http://sennan-sennan.jp/publics/index/18/>

7-2 「学習環境とその時空間」



教育評価としての実践記録

教育方法論 m 第 8 回

テーマ「教育評価論としての実践記録」 3 班

(1) 「新しい時代の教育方法」から

●教育実践：戦前日本の心ある教師たちが「教育を実際に担う教師こそが教育と研究を行う主体でなければならない」というメッセージを込めた言葉

⇒実践記録：「教育実践」を対象とし、いかなる時代や状況に向き合い教育したかを目的意識的に記述されたもの
「実践記録をどのように評価するか」 勝田守一（「実践記録」への批判を意識して書かれた論文）

- 1) 教師の生活記録であり教育実践にぶつかる問題や矛盾、解決方法を含み、人間としての教師の生活感を反映させたもの
- 2) 主体的感性的な認識を理論的に抽象化するのではなく形式化することを通して真実を語るもの
- 3) 仲間のなかで共通の値打ちが掘り起こされ共有財産(一般化)となることが目指される

(2) 「17 中学校学習指導要領解説」「18 高等学校学習指導要領解説」等から

●教育的鑑識眼：教育の世界(例えば良い授業や質の高い学び)を見分け評価することは、芸術の世界で典型的に行われる評価のあり方と類比できる

- 1) 教育は芸術と同様、質的に評価しなくてはならない部分が多い
 - 2) 評価とは数値的なものでも条件を満たせばよいというものでもない。また単なる好みでもない
 - 3) 見ただけではわからないかもしれない重要なことを見分ける技術や感受性は、教師にとって重要
 - 4) 鑑識眼を身につけるためにはどこに目をつけたらいいかを知ることが必要、そのような目のつけ所を知っているためにはたくさんの知識や経験が必要
- *教育批判：教育的鑑識眼によって捉えた評価対象の特質を言語化して他者にも広めていくこと

(3) その他のネット資料から長所・短所

●ブルームは教育目標を明確化することの意義を説いた。特に、予期せぬ教育の成果が現れたときには、その原因究明を十分に行い、教育方法や教育目標自体を改良していくことが重要だと反論

- 1) 初めに設定した教育目標を絶対視してはならない
- 2) 教師が教育目標を絶対視し続けていると、いずれ子どもは「評価されるような学び」しかしなくなってしまう。
- 3) 教育目標を「客観的に判断できる学力」に矮小化させてしまう恐れがある
- 4) 教育目標を達成することがどの次元の力の獲得に繋がるかに教育者の目を向けさせる

(4) 自分の意見

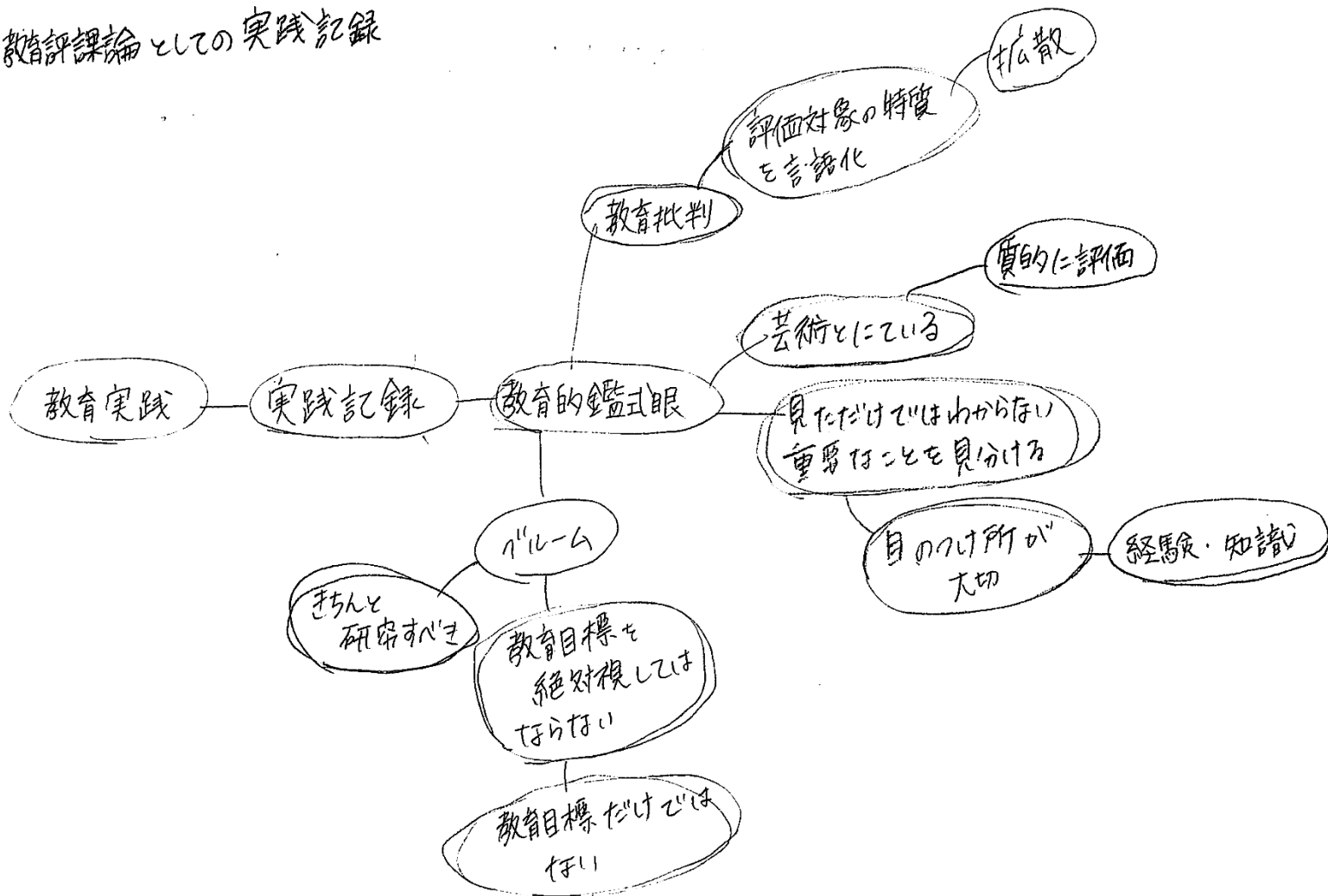
●実践記録を読むことで詳しく状況を知ることができ、評価方法や授業内容を振り返ることができるのではない

- 1) 「真正の評価」とは要するに「よい評価」を目指すことを目新しい言葉で言い換えているに過ぎないと前々回に書いてあったが、実践記録を読むことで良い評価とは何かを突き詰めることができるのではない
- 2) 実践記録を一般化することは難しいことなのか
- 3) 教職員だけの Twitter のようなものがあれば共有が簡単になるのではないかと考えた。

(5) 出典(文献名、url 等)

- (1) 「鑑識眼 (connoisseurship)」 <https://ameblo.jp/sophiainu/entry-12241995555.html>
- (2) 「教育目標を立てる前に考えたい 2 つのこと」 <https://note.com/luokkahuone/n/n7e73a260f207>

教育評議論としての実践記録



ICT活用例

ICT 活用例

1 班

1. 単 元

・ 数学 I 「2 次関数」

2. テーマ

関数ソフトを利用して最大値・最小値を見つける

3. ICT 活用のねらい

- ・ 課題に対する自分の考えをタブレットパソコンを利用して整理する力をつける。
- ・ グループ活動において、自分の考えと他者の考えを比較・検討しながら、新たに考えを構築すること。

4. ICT 活用例

学習内容	指導過程・学習活動	指導上の留意点
ICT 活用の場面 (電子黒板を使って考えの共有)	ICT 活用の手順 ○ 2 次関数において、定義域が与えられるときの最大値・最小値を求める。 ○ 計算によって軸・頂点を求めることと併行してタブレットパソコンを利用してグラフを描き、グラフから最大値・最小値を読み取り、実際の計算結果とペアで確認する。 ○ ①モールを使って長方形を作るとき、長方形の面積が最大となるのは、縦・横の長さがそれぞれ何 cm のときかを実際に折って予想する。 ・ グラフを利用するために立式。 ・ グラフをタブレットパソコンで描き確認 ○ グループでの検討内容を発表する。発表には書画機能を利用して立式・グラフを電子黒板に写す。 イメージ図など 	○ 最初に復習を行いグラフの理解をする。 ○ タブレットは 2 人で一つを共有しグループでの表現を高める。 ○、自分の考えと他者の考えを比較・検討しながら進める。
備考 準備物 電子黒板・タブレット・ソフト(grapes) 授業形態と工夫 グループで考えて電子黒板で全体に共有		

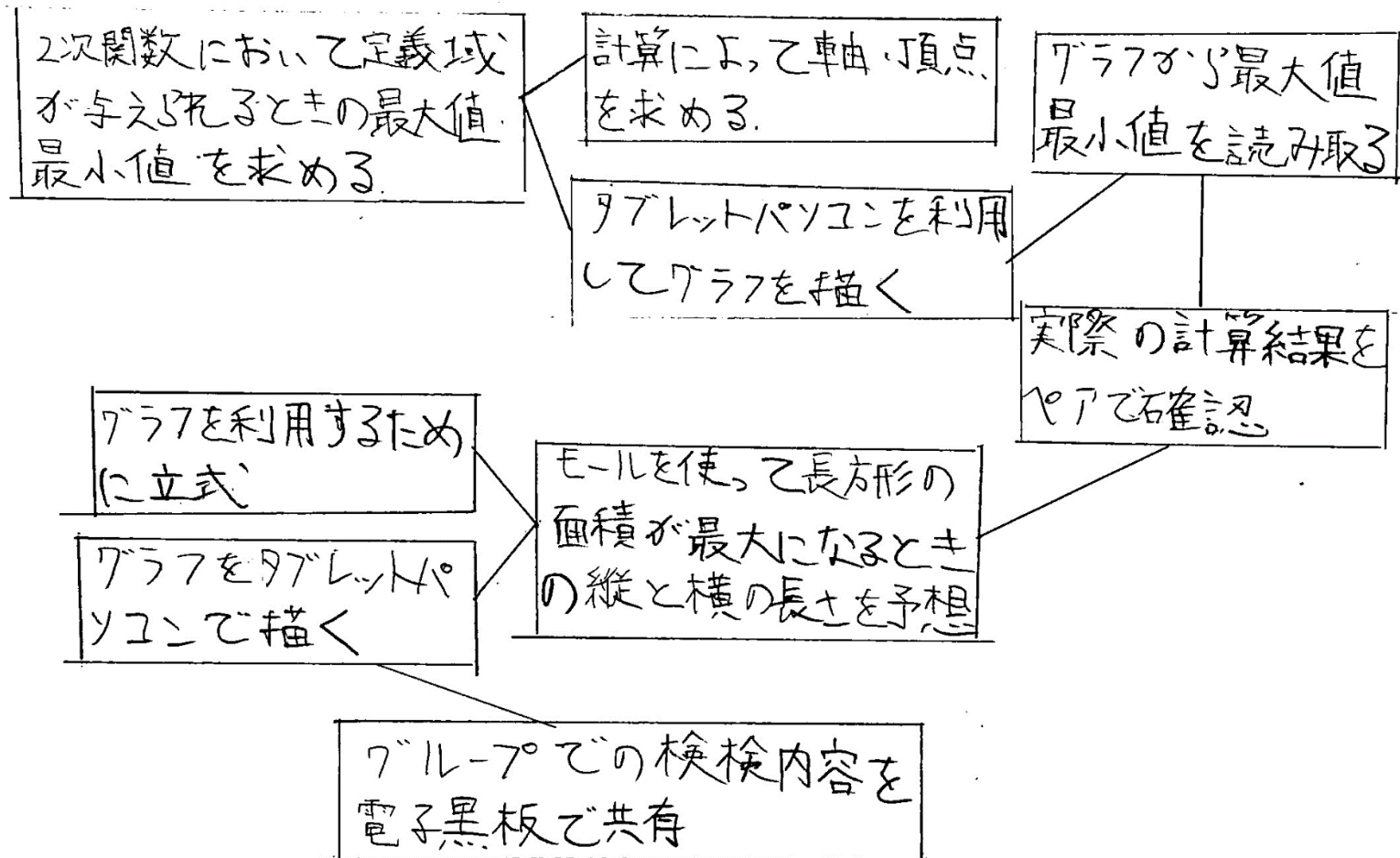
ICT 活用例

5. 出典・参考等

- ・ <https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1084694/ICTkatsuyoujissenjireisyuu.pdf>

「ICT活用例」

教法m第8回 概念系統図



ICT活用例

ICT 活用例

4 班

1. 単 元

座学

2. テーマ

Word・PowerPoint の活用

3. ICT 活用のねらい

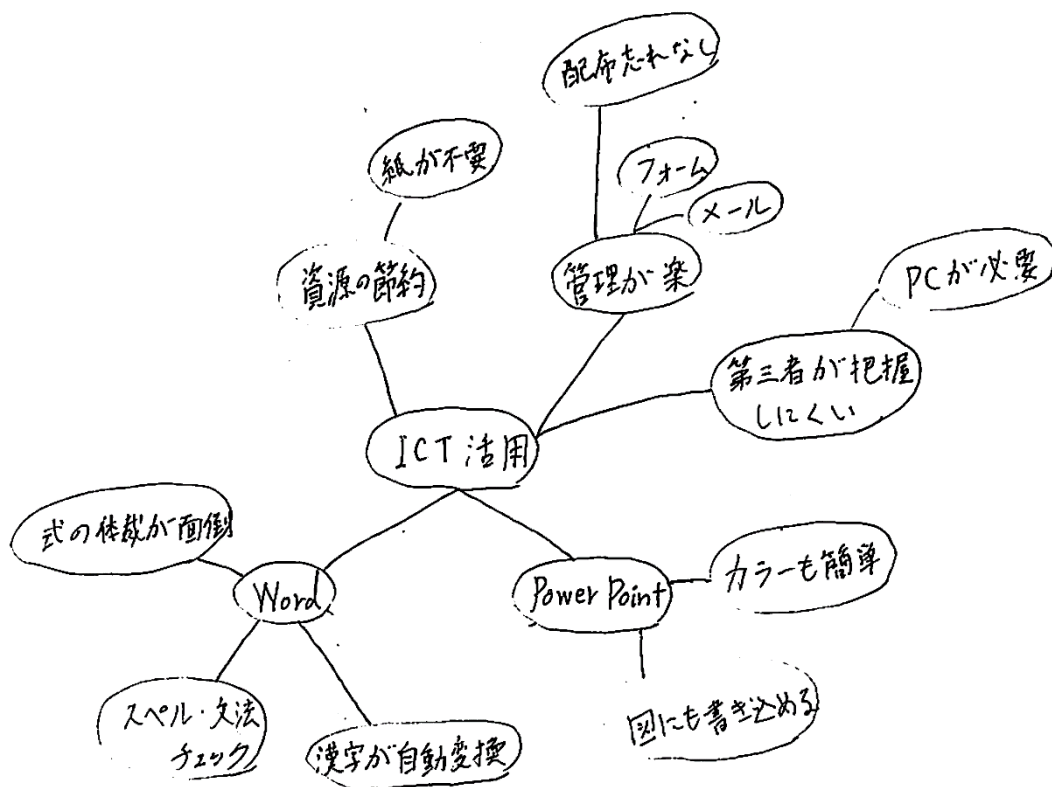
- ・資源の節約
- ・忘れ物の排除
- ・管理の簡易化

4. ICT 活用例

学習内容	指導過程・学習活動	指導上の留意点
ICT 活用の場面 (課題等の配布・提出)	ICT 活用の手順 ○課題のテンプレートを配布する ・データなので、紙などの資源を消費しない ・プリントの配布忘れや紛失がない ○テンプレートを編集して解答を書き込む ・社会の穴埋め問題は比較的簡単に作成できる ・理科はPowerPointで画像の付与も容易 ・英語のスペルミス等はアンダーラインが引かれるため、すぐにわかる ・数学の式の体裁を整えるのが面倒 ・国語の漢字等が無意味 ○フォームで提出する ・家に課題を忘れたなどという言い訳がなくなる ・回収の手間が省ける ・管理が楽	○ ・作成量が多い ・PCが使える前提 ○ ・科目によってはデメリットが大きい ・紙に書くよりも記憶に残らないかも ○ ・第三者が把握しづらい
備考 準備物・・・PC 授業形態と工夫・・・		

5. 出典・参考等

- ・大学の授業



確認問題07

教育方法論 m 確認問題07

3/9-082

(1) 日本カリキュラム学会が2004/1/1
 までカリキュラム構成の原理を
 3つ挙げた。

- ・学問中心カリキュラム
- ・社会中心カリキュラム
- ・人間中心カリキュラム

(2)

アプロプリエーションとはその手には
 第1に逆なる(模倣)では
 なく、自分の(文脈)に
 合わせた形で取り組まねば
 ということである。その場合、

「〇〇さんは△△といいますが、
 私はそれについて(2.〇〇とそれ
 (た)という(間接性)による表現
 になることがない。これには単
 なる(引用)で終わるので
 はなく、他者の考えをめぐり
 自分の(判断)や意見(交流)
 が行われることになる。第2に、
 他者の言葉(受容的)
 に取り入れるのではなく、時と
 場合(批判)や反論(対置)
 と「自己の言葉(対抗)」
 と「自己の言葉」と取り違えるこ
 ともある。

3) 高橋嘉博は授業は互いの緊張
 関係の中に成り立つと述べて
 いる。これについて、簡単に説明せよ。

高橋嘉博 P.170 180

- ・教師は「自分の知識」を伝える
 ために一方的に教えるような
 授業ではなく、教師と生徒
 互いに「対峙」し、教師と教材

「教材と教材」の間には「衝突」や「葛藤」が
 生じるような「緊張関係」をたてた授業がよい。

(4)

「教材で教える」という主張

--- 教材とは、一定の教科内容を扱った材料である。
 「教えるための材料」「学ぶための材料」である。

「目的-手段」として、目的は「学ぶこと」、
 P.173 180

自己評価

5/5

アプロプリエーションとは

他人の意見とそれを自分の意見として
 取り入れるのではなく、自分の意見と
 対峙し、自分の意見と

対峙し、自分の意見と
 対峙し、自分の意見と

